

④

重点領域研究「ミクロ統計データ」・公募研究（課題番号08209118）  
「家族構造の国際比較のための基礎的研究－公共利用マイクロデータの作成と活用－」  
平成8年度研究成果報告書（1）

## 公共利用マイクロデータの活用による 家族構造の国際比較研究

－米国NSFH調査データの利用を通して－

1997年3月

研究代表者 石原邦雄  
（東京都立大学）

## まえがき

諸外国と並んで日本においても、家族に関する総合的なデータを整え、かつそれを研究者のコミュニティに共同利用できる形で供給していくことが強く求められている。このような認識のもとに、日本家族社会学会（会長：正岡寛司）では、研究者集団による全国規模の家族の総合的学術調査の実施をめざして、「全国家族調査研究会（略称：NFR）」（代表：渡辺秀樹）を組織し、その実現に向けて活動中である。本研究は、その一翼を担うものとして企画されたものにほかならない。そのために、利用可能な米国での類似調査の個票レベルのデータを、日本との比較の視点において独自の集計分析を試みるとともに、予備的な調査を実施して、日本における全国規模の家族と世帯に関する総合的学術調査を実施する際の問題点を整理し、調査デザイン、調査項目等について検討を深め、その速やかな実現を目指そうとするものである。合わせて、データセットのメンテナンスと、共同利用のためのシステムづくりについて検討を進めることも目的となっている。

本年度は、広い範囲の研究協力者を募って分析作業班を構成し、家族研究データの中で最も先端的な試みとして知られている、米国のNational Survey of Families and Households（NSFH調査）の公開データにアクセスし、その第1次調査のデータを独自に解析する作業に取り組んだのである。大量の変数及びケース数のデータ処理の技術上の困難さについて身をもって学習しながら、各メンバーの独自のテーマによって日本との比較の観点から分析を進め、その結果をワーキングペーパーとしてとりまとめたものが本報告書である。支援体制をはじめとして利用環境が整備されている米国においては、このNSFHデータにとどまらず、多くの公共利用データを用いて続々研究が積み重ねられている。そうした状況と比較するなら、我々の試みはまだ初歩的なものに留まることは否めないが、日本においても同様のデータをつくり、共同利用できる体制を築いていこうとするための必要なステップであると考えている。

他方、本年度の研究費を使用して、計画中の日本の家族に関する全国的総合調査へ向けての予備的調査として、夫婦関係に焦点を当てた「夫婦関係と家族に関する調査」を企画・実施した。そちらは、研究成果報告書（2）として、第1次的な報告書を刊行している。合わせてご参照願いたい。

我々としては、第2年度も研究を継続し、NSFHの第2次調査データへのアクセスを含めて分析をさらに深めたいと考えている。個々の研究内容について、また共同研究の進め方についてご批判やご教示を頂ければ幸いである。

なお、今回利用したNSFHデータの作成代表者のひとりであるウィスコンシン大学のL. バンパス教授は、日本における我々の試みに深い理解を示され、当初より支援を賜っている。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。

1997年3月

石原邦雄

## 研究組織

研究代表者 石原邦雄（都立大学教授）

### 分担研究者

渡辺秀樹（慶応大学教授）

岩井紀子（大阪商業大学助教授）

稲葉昭英（都立大学講師）

木下栄二（桃山学院大学助教授）

田淵六郎（都立大学助手）

### 研究協力者

永井暁子（家計経済研究所研究員）

安達正嗣（名古屋市立大学助教授）

岩井八郎（京都大学助教授）

賀茂義則（ルイジアナ州立大学准教授）

藤本哲史（南山大学助教授）

品田知美

加藤彰彦（早稲田大学助手）

西村純子（慶応大学大学院）

松田苑子（淑徳大学教授）

土倉玲子（北海道大学大学院）

正岡寛司（早稲田大学教授）

藤見純子（大正大学教授）

島崎尚子（放送大学助教授）

西野理子（早稲田大学助手）

高田洋子（福井大学助教授）

畠中宗一（大阪市立大学助教授）

杉井潤子（神戸山手女子短大助教授）

## 研究経費

平成8年度

3400千円

## 目 次

まえがき

### I 序論

- 1 公共利用データの活用による家族構造の国際比較研究をめざして  
石原邦雄 …………… 1

### II 役割関係の動態——家事・育児をめぐる——

- 2 アメリカの夫婦の家事に関する公平感について  
永井暁子 …………… 10
- 3 家事時間に関わる要因分析  
品田知美・松田（熊谷）苑子 …………… 21
- 4 夫の家事分担に関する日米比較研究—NSFH と神戸調査  
岩井紀子 …………… 29
- 5 Discrepancy between Husband's and Wife's Responses  
in Division of Household Labor  
Yoshinori Kamo …………… 45
- 6 働く親の親役割行動と意識：就労特徴が子供との接し方に与える影響  
藤本哲史 …………… 59

### III ライフコースの展開と家族関係

- 7 女性のライフコースの動態：日米比較 —中間報告—  
岩井八郎 …………… 70
- 8 結婚および同棲タイミングに対する定位家族状況の効果  
——ライフコース移行のイベント・ヒストリー分析——  
加藤彰彦 …………… 85
- 9 横断的データにおける U 字型曲線の意味を探る  
——継続年数と、結婚幸福度との間に認められる  
U 字型曲線に対して、子供の存在の有無は影響力を持つか？——  
土倉玲子 …………… 100
- 10 エンプティ・ネスト期における夫婦関係  
西村純子 …………… 110
- 11 NSFH データを用いた老親・成人子同居分析の可能性  
—先行研究の検討を中心に—  
田淵六郎 …………… 120
- 12 アメリカ合衆国における高齢者のきょうだい関係  
—交流頻度の分析を中心に—  
安達正嗣 …………… 130

### IV データの共有と利用をめぐる問題

- 13 社会変動データの共有と第二次分析の方法  
正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・西野理子 …………… 139